



## なにがあっても生きていく

お嬢ちゃんも兄ちゃん達もまあ、足を崩して聞いてくださいな。  
こんな年寄りの言うことにゃ、近頃誰も耳を傾けてくれないが。

それは十年前のことだ。

マゾクとヒトは、自分たちの持っている土地だけではならず、奪い合いをしていた。ヒトはマゾクの多様な……変わった容姿をバカにして、マゾクはつるんとしたヒトの肌をなめくじみたいと忌み嫌った。

しかし遂に決着がつく時が来たんだ。

最後にお互いの代表者同士を戦わせ、長い戦争を終わらせることになったが、マゾク側は大いに焦った。

マゾクの王はその時「フォー」だった。花が好きで、気が優しいフォー。

王位を継ぐ者は双子で生まれ、より強大な力を持つ方が王になるはずが、長い戦乱の果てにフォーの片割れは死んでしまったのだ。

橋の中央で一騎打ちは行われた。勝敗は大方の予想通り、ヒトの勇者の勝利で終わった。

二人の子供は正反対の道を辿ることになる。

ヒトは栄え、マゾクを使う……。



さて、十年の日々が過ぎた。

マゾクは強制的な労働をさせられていた。

フォーの息子、クロマオーはベルトコンベアーで流れてくるひよこを次のコンベアーに載せる仕事をしていた。

マゾクは決して、無能ではなかったが、彼らが持っている力を子供たちは使い方すら知らなかった。

ただ繰り返し同じことをすることしか、この十年してこなかったから。



もちろんお給料は毎日のスナック菓子が買えるくらいしかもらえなかった。

ひよこが流れていく……。

落ちる前に次のコンベアーに載せる……。

デフォルトコマネチ（以下デフォ）「いや、いや、今日も大変ですね。ちょっとひよこの量が多すぎる。やっぱり一匹一匹丁寧に運びたいのに、こんな量いたんでは……！お、落ちる！」

クロマオー「拾うよ。……どう運ぼうと誰も何とも思わないさ。僕らの仕事なんて、誰も評価しない。サボってたら、工場長にハエたたきで叩かれるけど。」

デフォ「でも仕事には楽しみが無いといけませんよ、クロマオーさま。」

クロマオー「僕はもう『さま』じゃないよ。」

クロマオーはそっと笑った。

デフォは王家の身の回りを世話していた、フォーにお仕えした頃を思い出した。

片割れと違い、フォーはクロマオーを千仞の谷に落としたりはしなかった。ただ膝に乗せて可愛がり、背負って寝かすのを得意とした。クロマオーは、フォーとはもう十年会ってない。

それでも愛された記憶は、彼の大事な拠り所になり、こうした生活でもどこか明るかった。

デフォ「うわ、ちょっと、百匹くらい流れてきた！クロマオーさま！」

クロマオー「え、そんな、ああ！」

地に落ち散乱したひよこに、慌てる間もなく、工場長がやってきた。

工場長（ヒト）「また喋ってたな！」

だって喋るよ、そりゃ。仲間だものと思いながら、何匹を殺したのか分からない薄汚れたハエたたきで頭を叩かれる。

そしてデフォが奥の部屋に連れて行かれた。

デフォは忙しすぎると混乱してミスをしてしまうタチで、今回は初めてではなかった。きつく叱られるのだと思われた。

デフォはマイペースで出来る仕事が向いているとクロマオーは思う。

作業に戻ったクロマオーに、来客があった。茶色の髪のヒトの女の子。

ネイだ。



ネイ「クロマオー、付き合っ欲しい所があるんだけど。」

ネイは工場長の娘だった。

最近何が気に入ったのかクロマオーに会いに来る。付き合っ欲しい所と言われても、クロマオーは勝手に外出は出来ない。それにそのワードはドキドキする。付き合っ欲しいという所だけ、頭でリフレインする。

クロマオー「ネイちゃん、こんな所に来てお父さんは……工場長は何て言ってるの？」

ネイ「父は関係ない。」

クロマオー「僕としてはお父様の了解を……いや、決して、けっ結婚という意味ではなく、けっ結局僕はマゾクで」

ネイ「けがおおいね。いいじゃない。気にしないで。」

ネイの方が明らかに立場が強いので、クロマオーはたじたじだ。

ましてかわいいから、クロマオーも弱ってしまう。

ネイ「大丈夫。了解は取ってある。ただ、この首輪だけはつけないとうるさいみたい。」

マゾクを移動させる際必ずつける首輪を、ネイは持っていた。

ネイは悪びれもせず、クロマオーの首に手を伸ばした。

まるで新婚の妻がネクタイを夫に巻くように、愛溢れる仕草でクロマオーにつけた首輪は、

爆弾になっている。

予想外の行動、逃走やヒトに対して反抗すれば、誰に責められることもなく爆破出来た。

クロマオー「こえええええ！」

ネイ「まあまあ、じゃ、行きましょう。皆さまパンツを買いに出かけるから失礼します。」

ネイは「ヒトと出かけるのでは、恥ずかしくてパンツを買えない！」と言ってマゾクのクロマオーを連れ出すのに了承を得た為、大げさに皆に挨拶をした。

パンツを買う予定は一切ないのだが、クロマオーの頭にはぐるぐる「パンツ」という言葉が回った。

メリーゴーランドのように陽気な言葉だ。

## ネイちゃんのうしろすがた

---

出かける直前、クロマオーはヒトの執事にきつく言われた。

「もしオーガスタさまに何かあったら、お前のことを爆破するからな！」

ネイは何の反応もせずに、クロマオーの袖を引っ張っただけだった。

ネイはクロマオーにはそう名乗ったが、ヒトにはオーガスタと呼ばれていた。愛称なのかと思ったが、それにしても誰もネイと呼ぶヒトを見ない。密かに不思議に思っていたけれど、クロマオーは頭の中の“電話の構造が分からないのと一緒に”の棚にしまって、何も言わなかった。

門をくぐるまで、ネイは堂々と前を歩いた。くぐり終えると、にやあと笑ってクロマオーの横に来る。

ネイ「クロマオー、今日はまず雑貨やさんに行きます！そのあとパン屋に行って腹ごしらえして、うちに帰ります。」

クロマオー「パ...ンツ...」

ネイ「パン屋だよ。」

クロマオー「いやその、パンツは良いの？新しいパンツが必要なんじゃないの？」

ネイ「そんな汚いパンツ穿いてないよ。パンツ必要とか、衣食住みたいに言わないで。」

クロマオー「パンツを穿かずにはいられないのがヒトだと習ったよ。ちなみにマゾクはちょいちょい穿いてないよ。」

ネイ「文化の違いだね。マゾクはヒトを知らないの。ヒトがマゾクを知らないようにね。」

やがて雑貨やさんに着いた。クロマオーは街を見まわすのに一生懸命だった。

ポスターには見世物にされてるマゾクがいたり、美しいマゾクは散歩に連れていかれているようだった。

笑顔を張りつかせ、主人の後をいく。

ふとネイの首を見る。

クロマオーは動作が俊敏ではない。だが、力は結構あるので、ネイを締め上げるのは苦労はしなさそうだ。

不穩に感じさせず近づき、いきなりやってしまえば、勝率は高そうだ。

でも、ネイはヒトだが、悪ではないと思う。視線に気づいたネイがほほ笑む。

ヒトだが悪ではない。その言葉が、胸に沁み入った。



ネイ「クロマオー、疲れた？」

心配そうだ。ネイは分かってない。与える者は、いつでも何てことなく世界をまるく見ているから。

ネイ「ヒトが沢山いるから、疲れるよね。これだけ買って、次行こう！これ凄いんだよ。」

ネイはレース模様のケースに入った何かを買った。愛想良く雑貨やさんの主人は釣りを渡す。

パン屋に行こうとせがまれ、ついていった。

パン屋は裏路地に入った所に店を構えていた。看板には消えかかった文字で「●●お断り」と書かれている。何がお断りなのか？

ネイ「すみませーん！」

ネイが呼ぶと、店主が顔を出した。



ギィィィ...という音とともに。

店主「何だお前！お断りだ！」

ネイ「おじさん、こんにちは。あの.....。」

店主「オーガスタ！今日はお断りだ！ああいやだ！帰れ帰れ！」

ネイ「どうして？いつもパンを売ってくれるじゃない？」

店主「そのうしろのヤツが気に食わない！帰れ帰れ！オーガスタはまたどうぞ！帰れ帰れ！」

バタンと扉は閉まった。

ネイ「せっかく来たのに.....。」

クロマオー「きっと『マゾクお断り』なのさ。」

ネイ「そんなことない。この看板はずっとあって、何が書いてあったかは知らないけど、そうじゃない。」

クロマオー「いやそうだ。実際、僕を嫌がっているじゃないか。」

ネイ「ただ生まれてきたのがマゾクなだけで、嫌われることなんてないわ。」

クロマオー「あるんだ。僕は、マゾクだから分かる。」

ネイ「どうして私をのけものにするの？」

クロマオー「ずっと僕らをのけものにしてきたのは、ヒトじゃないか。」

ネイ「ヒトじゃない。」

ネイは苦しそうに言った。

ネイ「私はヒトじゃない、ネイだよ。私は、ネイだ。」

ネイはクロマオーに先ほどのケースに入った何かを投げつけた。

そしてどこかへ駆けだした。

小川が近くにあるようだ。せせらぎが耳に届く。



クロマオーは十年ぶりに一人きりになった。

## 僕はクロマオー

---

クロマオーはすこし混乱していた。

ドキドキした気持ちをまず落ち着けなければ、と思った時、近くに小川があることに気付いた。

小川はさらさら、ためらいなく流れていた。誰もおらず、クロマオーが人心地つくのにはうってつけだった。

冷たい水に触れてみる。クロマオーの黒い肌を、曖昧に青く染めて、また逃げるように去っていく。

ネイちゃんみたいだ、とクロマオーは思った。

このままこうして離れていたら、ネイはクロマオーを爆破するのだろうか。

反抗した自分の命はないのだろうか。

クロマオーがうつむくと、手の中の綺麗なケースが目に入った。レース模様の可愛らしい箱の中に何が入っているのか。パカッとクロマオーは開けてみた。

中にはメモ帳らしき紙が何枚か入っている。しかし手に取ると、それは突然、泡になった。

クロマオー「え？え？」

人魚姫みたいな紙は手に張り付いて、取ろうとこすれば更に泡になった。これは何だ？

クロマオーはネイが、「すごいんだ」と言っていたのを思い出した。

これは、薄い紙のようだけど、石鹸？

ネイはこういうのが好きなのか。綺麗好きだな。持ち歩くんだろう、きっと……。

クロマオーはネイのことを思った。

かわいいネイを。



クロマオー「さて、探そう。」

立ち上がり、パン屋にかえる。ネイが戻っているかもしれない。  
このまま一人でいることは出来ないのだ。ネイを守ると決めたから。

クロマオーはまた●●お断りの前に立った。苦しい気持ちで、ノックをする。  
たとえ受け入れてくれない相手でも、向かっていかなければならない時もある。

クロマオー「すみません。ネイ……いやオーガスタさまは来ませんでしたか？」

パン屋の店主は今度は勢いよく扉を開けた。そしてきつく睨むと、

店主「帰れ帰れ！」

クロマオーは怯まなかった。開いた扉のノブをぐっと掴み、正面から店主を見た。  
視線を落とし、店主はクロマオーの手を見た。そして怒り狂って言った。

店主「てめー習字でもやったのか！何で腕から手まで黒いんだ！俺の人生をかけているパンと  
店を、汚い手で触るんじゃない！」

そう、「汚いお断り」だったのだ！  
クロマオーはびっくりして、慌てて言う。

クロマオー「これは肌の色だよ。習字はやってません。今洗ったばかりですよ。」



店主はしげしげとクロマオーの手を引っ掴んで見つめた。ピカピカのクロマオーの手。やがて、オッケーサインを出す。

店主「そうか、知らなかった。そんな肌の色があるなんて。」

クロマオー「僕はマゾクだから……。」

店主「そっか。」

軽い口ぶりで笑うと、

店主はネイは先ほどから来ていないと言い、クロマオーにパンを持たせた。

お詫びだと言う。

手の美しさを見抜けなかったお詫びだと。

きみは僕がまもる

---

パン屋の店主は、思い出したように言った。

店主「そういえば、警報が出ていた。林から猛獣が街に出てきたと。早くオーガスタと合流しなさい。」

『きみが彼女を守りなさい。』

クロマオーは駆けだした。猛獣って何だ？ネイちゃんはどこにいる？頭は再びゴチャゴチャだ。ネイはクロマオーの頭をすぐにコンガラカセル。コンガラカセルって魔法の名前みたいだ、とぼんやりと思う。ネイはまほうつかい……。

その頃、ネイと言えはヒトがいない街をぼつぼつ歩いていた。服屋の扉をノックすると、女主人が顔を出した。

女主人「何だい、今日は店じまいだよ。」

ネイ「早くない？」

女主人「警報を知らないのかい。スケベ・おっさんが街に出てきたんだよ。」

ネイ「おっさんが？」

おっさんは普段林に群れをなして住んでいる動物だ。朝になるとレッシュヤと呼ばれる箱にギュウギュウ詰めに乗り込み、メスのおっさんの尻を触る。この尻を触るという行為がおっさんの求愛の特徴である。

たまにはぐれおっさんが街に出てくると、メスのヒトが被害に合うことが多い。オシャク、オシャクと鳴きながら、どこかしらを触ろうと近づいてくる為、ヒトは警報を出して避難を呼び掛けている。

しかしヒトの上層部は、このおっさんの保護に意欲的だ。ヒトが繁栄することで、自然界を壊してはならないという。

自然動物であるおっさんを傷つけるのは罪に当たるのだ。

女主人「帰りなさい、あなたも。今日はお買い物には最低な日よ。」

ネイ「……はい。」

ネイは踵を返した。クロマオーの所に戻らなければいけない。どんな顔をして会えばいいのか、ネイには分からなかった。

クロマオーに分かって欲しい気持ちがあった。難しいのは、考えていることを表現することだ。

その時だった。後方から、おっさんの荒々しい「オシャク」の鳴き声が聞こえてきた。どんどん

近づいてくる！

ネイは走り出した。おっさんはその尻を見て、世界陸上に出れそうなスピードで猛追してきた。両手を前に出し、揉みほぐすようにワキワキと動かす。軽やかな飛ぶような走行、その速さ、秒速10m。

クロマオーも走っていた。

ネイが先ほど訪れた雑貨屋に向かい出した。

主人は屋台をしまっている所だった。

クロマオーを見ると、路上のガムを見るような眼で見下した。

主人「先ほどのお嬢さんのマゾクだな。お前、逃げ出してきたのか。」

主人はヨーヨー型の電話機をしゅるんと投げた。するとすぐに警察に繋がる。クロマオーは最後まで見ずに、逃げ出した。逃亡の容疑をかけられたものを、再度見たことが無い。

主人「今度は金を持ってくるんだな！お客として扱ってやるよ！」

走って走って、限界を超えて街に行く。

一刻も早くネイの元へ。

## 出会いの雨が降る

---

街には、しとしとと雨が降り始めていた。

ネイは公園のジャングルジムの上にいた。雨で体が冷える。

しかしこの上までは、おっさんの太った体では登れない。

眼下にはわきわきと指を動かしたおっさんが熱くこちらを見ている。

捕まらないが、動くことも出来ない。警報が出ている為、助けも期待できなかった。

このまま寒くて死んでしまうのではないか、ネイはジャングルジムの鉄の棒を、指が白くなるまで握りしめた。

“私が死ぬとしたら……”、ネイは思う。

“ネイとして死ぬのだろうか。オーガスタとして死ぬのだろうか。”

私は誰なのだろう。ここで雨に打たれる私は……。

同じ頃、街の南側のゴミ捨て場で、デフォルトコマネチは胡坐をかいていた。

決して不遜な態度をとっているわけではない。彼の足はコマネチ状になっているので、そうしか座れないのだ。

デフォは工場長に捨てられた。首には時限装置が付いていて、三日で自分のわきにあるゴミと同じようになる。

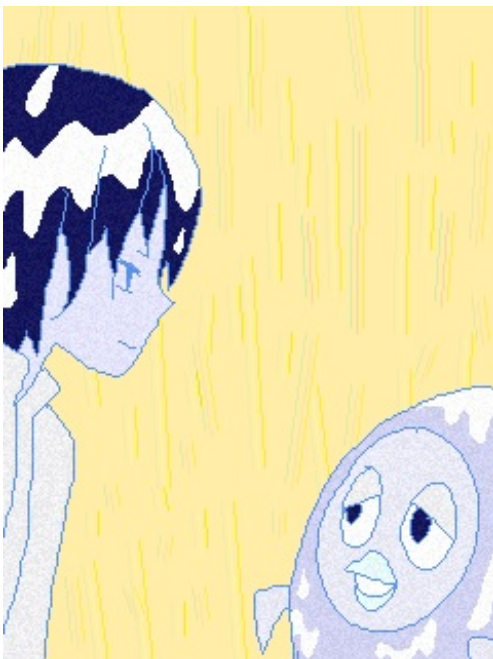
ただ意思があるだけで、もう既にゴミなのかもしれないとも思う。

デフォは情けない上瞼を、これ以上垂れないように押さえた。

すると雨は身の内からも降っていることを知った。

そこに近づくものがいた。

傘もさしてない男のヒトだ。



何も言わない。ひやかしかと思ったが、恐れもせず寄ってきて首元に顔をうずめてきた。不思議に思う間もなく、爆弾がはずされる。

デフォ「あなたは誰ですか？私はネコハズイ工場の、デフォルトコマネチです。工場長が私に帰るよう言っているのですか？」

男「お前は捨てられたんだろう。死んでも良いと思われたんだ。希望は持つな。」

デフォ「だって、自分を助けてくれるヒトなんて思いつかないから……。」

男「お前が思うより、ヒトには沢山の種類がある。なめくじみたいとしか思っていないから、それが見抜けないんだ。」

男は無言を言わずにデフォを抱えあげた。そして、気付かなかったが背後には二匹のマゾクがいた。マゾク達は男の足元からもう大丈夫と慰めてくれて、馬車に乗せられるとすぐ毛布をかけてくれた。

男は馬車を動かすためか、去って行った。

マゾク達はそれを確認するとすぐ、デフォの耳にそっと告げた。

「あの人はシロバンチョー。希代のバカ息子って言われてる、本当の勇者だ。」

どちらが本当なのか、その時のデフォには分からないけれど、とにかく生きるためには大人しくシロバンチョーについていくことが大事なのは分かった。

馬車は揺れて、動きだす。

ネイは頭を抱えていた。とにかく寒いし、下ではおっさんが荒い息で「オシャクオシャク！」と鳴いているし、手の施しようがなかった。

今日は最低の日だと思う。

風邪をひくのは確実だ。

すこしヤケになって、足をおっさんに差し出すように投げだすと、おっさんは舌なめずりした。殺意が起きる。だが、法律で保護された動物だ。

その時だ。クロマオーの声が聞こえてきた。ネイちゃああああんネイちゃああああん、クロマオーここだよー。

合わせておっさんも遠吠えした。

すぐジャングルジムの下までクロマオーはやってきた。おっさんは、指をおちょこの形にして手首をクイツと曲げクロマオーを威嚇した。臨戦態勢の時に出るポーズだ。更に首に巻いたネクタイを頭に巻きかえた。

ネイ「クロマオー、気をつけて！」



おっさんはクロマオーに向けて、水たまりをはねて駆けだした。

クロマオーはキッとおっさんを睨んだ。そんな顔、ネイは初めて見た。戦うことなど出来ないと考えていた。

おっさんとクロマオーを繋ぐ対角線状に、点在する水たまり。

そこにクロマオーは何かを投げた。

息を切らし突進するおっさんは、その水たまりに踏み入れた途端、噴出した泡に足を滑らせた。

クロマオー「ネイちゃん、さあ！」

クロマオーはネイを抱き上げ、その場から一刻も早く離れようと再び走った。

後方で、おっさんが膝が痛いらしく、コンドロイチンコンドロイチンと鳴いている。どうしよう、怪我させたら問題だよと言うと、あれは事故だとクロマオーは断言した。

公園の出口で、馬車が一台止まっていた。クロマオーは必死で扉を叩く。ネイだけでも乗せてもらおうと思ったのだ。

体が冷たい。このままでは可哀想だった。

おっさんもじき復活するに違いない。

馬車の運転席から、黒髪のヒトの男が降りてきた。

彼は長いロープを軽く回していた。

雨で水を吸った為に、重たい響きだった。

はたらくということはってクロマオーは考えた

---

雨は更に激しさを増す。

男「前になら乗せても良い。まずちょっと待て。」

木造りの馬車後部から男は毛布を持ってきて、背のネイに投げた。積み荷は何だろう？  
そのまま待ってると告げて、公園に入って行った。  
ものの五分で帰り、縄で縛られたおっさんを引きずっている。

男「これを後ろに積むから、後ろは嫌だろう？」

おっさんを投げ込むと、悲鳴が聞こえた。誰か一緒に乗ってますか？と聞くと関係ないことだとバツサリ。  
そのまま助手席にキュウキュウ詰めに乗った。

小さな窓で姿は見えないが、運転席の男に向かって後部から声がかかる。

「何ですかこれー！何ですかこれー！触ってきます！シロバンチョーさまあ！」  
「キモいです！キモいです！シロバンチョーさま！」

キャアキャアと騒ぐ中に、聞き覚えのある声がある。でもクロマオーは“雷が最初に光った時”と同じで、気のせいだと思った。

クロマオー「あなたはシロバンチョーっていうんですね。ありがとうございます。」  
シロバンチョー「いーえ。」  
クロマオー「何かお礼をしないといけません。あつついべーぜで良いですか？」  
シロバンチョー「嫌だ。おろすぞ。」  
クロマオー「三枚にはやめて！一夜干しにしないで！」

ネイは終始黙っていた。クロマオーが嫌なお礼を言い、断られるのをしばらく続けた。

クロマオー「何をしたら良いですか、あなたに。何でもします。」  
シロバンチョー「何もしなくていい。」  
クロマオー「それじゃあこの気持ちが収まりません。」  
シロバンチョー「いてくれるだけでいい。こんな雨の中に置き去りにしないでいい。」  
クロマオー「何それ。良い人みたいに。」  
シロバンチョー「いつだって納得できる自分でいたいだけなんだ。お前たちを乗せないと、心が納得しないんだから自分の問題だ。良い人とは言わない。」

「よっ馬鹿息子！」

後部から、声がかかる。多分、そういうヒトなんだろうと思った。

それからすこしだけ話をした。嬉しかったのは、シロバンチョーが『♪青い空の下』を知っていたことだ。

この歌はマゾクの作者だった筈だ。ヒトも知っているとは思わなかった。

クロマオーが歌うと、口笛を吹いてくれた。ついに泣きだした雨空も、嬉しげに雲のカーテンを引いた。

やがて、ネコハズイ工場に着いた。

握手をして別れる。シロバンチョーは目を糸のように細くして笑う。お月さまみたいだと思う。

さて、明日からまた仕事だ。終わりが見えない。クロマオーは空を仰いだ。

しかしあの暗澹たる気持ちはなりをひそめ、爽やかだった。すこし外出するだけで、全然違うのだと気付く。

はたらくということはってクロマオーは考えた。

殆どのが、誰かに認められることはないのだ。

ただどれだけ、自分自身が納得出来るかが問題なのだ。ここにいていい、と。

自分の居場所はここだよ、と。

クロマオーはここから、許可なしでは動けない。

だから選ぶことは出来ないが、考えることは空のように自由だ。

どう納得できる場所にするか。まず上を向いて考えねばならんのだ。

このお話は一旦ここで区切ろう。まずお茶を飲んで、それから彼らの続きをお話しよう。

看守さーーん。

お茶！

ダメ？

お・願・い！！！！

[続く]